

年会長挨拶



第41回日本分子生物学会年会

年会長 石野 史敏

(東京医科歯科大学難治疾患研究所)

大変嬉しいニュースが飛び込んできました。もちろん本庶佑先生のノーベル医学生理学賞受賞の話です！第41回日本分子生物学会年会のテーマには「日本からオリジナリティーを発信しよう」を掲げましたが、まさにそれを実践され、評価されたものと大変嬉しく思っています。大隅良典先生、山中伸弥先生のご業績もそうですが、人類の文化発展に高く貢献したことを誇れるものを持っているわたしたちは幸せだと思います。是非とも、これに続きたいものです。

現代の科学は西洋思想に基づいて成立したのですが、日本人の自然や生物への向かい合い方は独特であり、それが実験の発想、結果の解釈などにも微妙な影響を与えていると思います。ですから、わたしたちが「自らの好奇心を追求する研究を深める」ことこそが「日本からのオリジナリティーを生み出す」ことにつながると感じています。ポスターにクロード・モネの代表作の一つ「ラ・ジャポネーズ」を採用したのも、そのような意図を込めています。いつものように分子生物学会風アレンジが加えてあり、背景に書かれている団扇のデザインには、これまでGenes to Cells誌の表紙を飾った図から、私の専門のDNA、ゲノム、エピジェネティクスに関係するものを集めています。編集部のご好意で使わせていただきましたので、是非、学会ホームページのGenes to Cellsの表紙ギャラリー*の説明と合わせて楽しんでください。なお、この年会テーマと関連して大会最終日の昼には、作家の佐藤優さんに特別講演「科学に潜む宗教的思考の危うさ」をお願いしています。宗教観に由来する「日本と西洋」の違いだけでなく、思想活動そのものに潜む盲点にまで踏み込んだ講演をしていただけるものと思っています。

今年会では昨年に引き続き、午後一番の大会のメインの時間にポスターの発表時間が設定されています。そしてLate breaking abstractを含め全てのポスター発表にディスカッサーを配置しています。分子生物学会年会の原点である活発な議論を十分に堪能して下さい。ディスカッサーとして御協力いただきます多数の先生方には、この場を借りて感謝を申し上げます。シンポジウム企画はプログラム委員会の先生方をお願いをしました。聴衆・発表者ともが刺激を受けられるような魅力的な企画を立てていただいたと思っています。注目していただきたいのは、シンポジウム・ワークショップ全体の1/3で、女性・若手がオーガナイザー・座長を務めていることです。国際学会と比較するとまだ十分ではないですが、この流れが日本の学会の新しい形になっていくことを期待しています。海外若手研究者招聘企画である留学中の海外会員の発表支援は、学会からの要請を受け今年会では復活させました。また、奇しくも平成で最後の年となった2018年は、西日本豪雨、北海道地震、数々の台風など多くの災害に見舞われた年となりましたが、被災された学生会員には、例年通り参加費免除の対応をしております。参加された全ての会員の皆さんが、今年会で有意義な時間を過ごしていただけるよう祈念しております。

最後になりましたが、基礎系の学会がこのような大きな年会を横浜で開催するためには、展示会場やランチョンセミナーの運営などで関連企業の方々に大変お世話になっています。横浜では、幸いポスターと企業展示が同じ会場に設置されています。学生会員と年会を支援して下さる企業の方々の、どちらもが満足感を持って大会を終えられるよう、会員の皆様には企業展示にも頻繁に足を運んでくださるようお願いいたします。

*http://www.mbsj.jp/gtc/cover_gallery.html